Kaleidoscope

Vol.1

“ワルサーP38はどこへいった”

くろがね　ゆう
イラスト：明日　蘭

●ギャップ

世界最大で、しかも最高速というコンピューターACOS2040は、1秒間に1億7千万回の命令を実行できるという。どのくらい速いのかさっぱり想像できないけど、とにかくスゴイものであることだけは確かだ。

そのACOS2040は日本電気と日電東芝情報システムの開発というから、純然たる日本製ということになる。

そんなに文明の、というか技術の進んだ日本でも、いなかにどが3つくらい付くヘンピなところがあるんだそうな。

かくいうボクの生まれ故郷も、日本一（ということは、あるいは世界一?）過疎化率が高いといわれたことのある部落がある町だから、どは2つくらい付くといってもいいだろう。

もちろん洋品店はあってもブティックなんてない。ましてディスコや性風俗のお店など言うまでもない。

そんなイナカにどがもうひとつ付くとどうなるか……。

人から聞いた話だから、ホントかどうかわからないけど、無責任に書いてみると、すごい僻地があってそこにはオモチャ屋さんはもちろん、本屋さんもないんだって。だから、マンガ本もめったに見れないし、またあまりその必要もないらしい。

で、あるとき、そんな環境で暮らしている少年から通販の会社にモデルガンのカタログの注文があったそうだ。

「ボクたちは、毎日撃ち合いゴッコをして遊ぶときに、手を黒く塗ってピストルの形に握り、口でバンバン言ってやってました。ところがある日、いつものように遊んでいると、マンガ本が落ちていて、その広告にモデルガンというオモチャのピストルがあることが書いてありました。どうかそのカタログを送ってください」

ACOS2040と黒く塗った手には、かなりのギャップがある。

●銀玉の時代

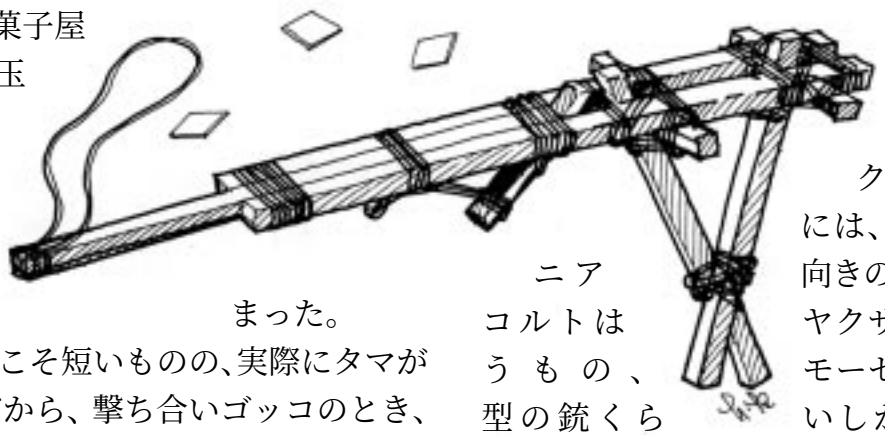
ボクはさすがに手は黒く塗らなかったが、ワリバシを輪ゴムで巻いて作った紙

鉄砲は使った。

しかし、命中精度も悪い骨組みだけのようなテッポウにはすぐアキた。次にボクの相棒となったのは、巻玉テッポウ。色も黒く、大きさも手ごろで、撃ち合いゴッコには最適だった。

ピストルはさほど好きじゃない子供にとって、このオモチャはしばらくメインの遊び道具とするだけの価値はあったようだ。

でも、駄菓子屋さんで銀玉テッポウを発見すると、事情が変わってしまった。



射程距離こそ短いものの、実際にタマが飛ぶものだから、撃ち合いゴッコのとき、やれ当たったのイヤ当たっていないのと言い争いになることがない。当たったところで、たいしてイタくないしね。

ボクは銀玉テッポウのおかげで、銃の名前を初めて覚えた。ワルサーP38、ルガーP08。コルトは刑事物のドラマで覚えたが、それがガバメントというものであることを知ったのは、モデルガンを集めだしてからのことだ。

当時、ボクの住んでいたイナカの駄菓子屋さんには、4種類の銀玉テッポウがあった。今にして思えば、それらはワルサー、ルガーと、コルト・コマンダー風（シルバーもあった）およびモーゼルHsc。ほとんど銃なんて知らない子供たちが買うものであるにもかかわらず、そのころのガン・マニアの人気どころをちゃんと押さえていたのである。

当時、どれも3,800円という値段が付けられていたモデルガンにしても種類は少なく、ほかにピースメーカーなどがあったにすぎない。

●あこがれのワルサー P38

つまり、それら4種はマニアの間ではメジャーな名前であり、ハードボイルド気取りは、ワルサー、ルガー、コルト、モーゼルの名前くらいは言えたもの（?）なのだ。

そのころボクのイメージには、ルガーはマニア向きの美術骨董品、コルトはヤクザ屋さんが使うもの、モーゼルは古い大型の銃くらいしかなかった。ワルサーだけ、プロの選ぶ銃、将校の銃、良い（?）スパイの銃というイメージがあった。

つまり、当時数々あった銃の中でウエスタンものを除けば、ワルサーはあこがれの銃といった響きがあったのだ。かの007氏がワルサーを使っていたことも、その名を高めるのに一役買っていた。

しばらくして、友達からNAKATA製の黒い亜鉛合金製P38を見せてもらった。ダブル・アクション、シングル・アクションもでき、サム・セイフティが巧妙に働くではないか。より気に入ってしまった。

優雅なスタイル、いかにもドイツらしいメカっぽさ。

この崇拝にも似た気持ちは、その後アニメ「ルパンIII」で一気に高まった。

エンド・タイトルの、スローモーション

で描かれるP38の射撃作動シーンのアップ。記憶がさだかじゃないが、確かショート・リコイルして排莢していたと思う。ブローバックとかショート・リコイルという言葉も覚えて、興奮した。

気持ちはどんどんエスカレートして、P38さえ買えたら自分はどうなってもいい、なんて思い詰める始末。

● P38はどこへいった?

それが、昨今とんと見かけなくなってしまった。サバイバル・ゲームだ、シューティング・マッチだと、ガンのオモチャは、テニスのラケット、スキーの板みたいに用具・用品になった感もある。

それが、悪いとか、シューティングがキライだとか、エアーガンは危険だとか言う気はサラサラない。むしろ、おもしろくなってきたな、と思いもする。

が、しかし、だ。

ボクはコレクション・アイテムとしてのテッポウも欲しいんだ。モデルガンにこだわるのも、そのへんのことなんだよ。

無理に分けるとしたら、はやい話、ボクはコレクター。

昔から“銃愛好家”に、どんどん外に出て遊ぶように勧めてきたけど、みんなが外に出てしまったら今度は淋しくなってきたってわけかな。

そんな、こんなで、モデルガンにも、もうちょっとガンバってほしくて、「オーイ、P38はどこへ行ったあー」だったりする。

だから、エンフィールドには、思わず涙してしまったのだ、オジサンは……。■